

2021年11月6日開催

シンポジウム

「高木八尺 その学問と社会活動——CPAS 高木八尺  
デジタルアーカイブ公開に寄せて」参加記

去る11月6日、東京大学アメリカ太平洋地域研究センター(CPAS)において、高木八尺デジタルアーカイブの公開を記念したシンポジウムが開催された。オンラインでの開催ではあったものの、同アーカイブの特色や内容、そして高木八尺の多彩な活動の軌跡について、理解を深める機会となった。

はじめに、CPAS助教として高木八尺デジタルアーカイブの設立に携わられた南山大学の森山貴仁先生より、高木の略歴と功績、ならびに同アーカイブの特色が紹介された。高木は、日本におけるアメリカ研究の草分けであると同時に、第二次世界大戦をはさんで日米関係が大きく変動する時代において、両国の相互理解の深化に尽力した人物である。報告では、そうした高木の幅広い活動の足跡を伝える貴重な一次資料がデジタル化され、一般公開されたことの意義が確認された。さらに報告後の質疑応答においては、著作権やプライバシー保護の観点から、ひとつひとつの資料についてインターネット上での公開が適切であるか精査されたという作業工程や、一万点以上におよぶという公開資料の書誌情報を整理し、メタデータを構築していった際に苦労された点などが語られ、同アーカイブが一般公開されるまでの長い道のりを垣間見ることができた。

続けて、太平洋問題調査会(IPR)について研究されてきた千葉大学の高光佳絵先生が、戦前の国際政治における高木の働きについて報告された。IPRは、太平洋地域における各国の相互理解の深化と関係改善を目指して設立された民間の学術組織である。高木は日本IPRの中心的存在として、発足当時からその活動に積極的に関わっていた。しかし、満州事変を機に日本が国際的に孤立していく中で、高木をはじめとする日本の知識人は、IPRにおいて日本の立場について諸外国の理解を求めるという、外交上の使命を負うこととなった。高光先生は、日米交流の深化を切に願い、両国の関係悪化を食い止めようと奮闘しながらも、国際的な知的交流の場で孤立していき、日米の断絶を防ぐことができなかった日本知識人としての高木の苦悩を明らかにされた。

大阪大学の中嶋啓雄先生は、戦後の日米の知的交流の再興において、高木が果たした役割について報告された。高木は戦前より、東京大学において、日米両国の親善を目的に設立された「ヘボン講座」を担当し、日本におけるアメリカ研究を牽引するとともに、留学時代に培った人脈をもとにアメリカの知識人と広く深い交友関係を築いていた。中嶋先生は、高木がアメリカの知識人との間に培った個人的交友関係を生かして、戦争によって断絶した日米の知的交流の再生と、日本のアメリカ研究の再興に尽力してきたことを紹介された。

続けて、高崎経済大学の三牧聖子先生と東京大学の橋川健竜先生が討論者として登壇された。三牧先生は、IPRについて研究されてきたご自身の知見から、高木を中心とした日

本IPRの活動の限界について問いかけられた。特に、太平洋地域の安定化を目指すとしながらも日米関係の改善ばかりを重視し、リベラリズムを標榜しながらもナショナリズムを克服できず、結果的に日本の帝国主義政策に加担したとも解釈できる日本IPRの問題点を指摘され、後の質疑応答セッションにおける活発な意見交換を導かれた。

橋川先生は、高木の代表的論文として知られる「米国政治史における土地の意義」(1927年)などを足掛かりに、高木の学術研究とIPRにおける活動の接点を探られた。この論文において高木は、フロンティアの消滅という危機に直面していたアメリカの将来について、歴史学的観点から問題提起をしているという。そこには、自由放任的自由主義と帝国主義が世界を席卷しつつあった当時の国際情勢に対する、高木の問題意識を読み取ることができるという。橋川先生はこのように、高木の学術研究とIPRにおける活動に通底するテーマを指摘された上で、少人数のエリートによる語り合いに立脚していた彼の活動のあり方を、現代においてどう評価するべきか問いかけられた。

総じて、当シンポジウムは、高木八尺の学術的・社会的功績を紹介しつつ、デジタルアーカイブを活用した今後の研究の展望と、その可能性の豊かさを示唆する内容となった。個人的には、日米関係が大きく揺れ動いた時代に、アメリカ研究者が担っていた社会的責任の重さに目が開かれる思いであった。学問的領域に止まらず、両国の親善のために尽力した高木の働きの大きさは計り知れない。確かに、アメリカ史を見つめながらも民主主義という普遍的理念の可能性を探り、その先に日本という国のあり方、そして国際秩序のあり方を探究していた高木の眼差しは、現代のアメリカ研究のあり方と大きく異なると言えるだろう。しかし、高木が紡いだ日米の知的・学問的交流の上に、現代の日本のアメリカ研究が築かれてきたことに、改めて気付かされた。高木八尺デジタルアーカイブが、今後さまざまな研究者によって利用され、高木というひとりの知識人について、そして日本のアメリカ研究や日米・太平洋地域の歴史について、私たちの理解をさらに深めていくことを期待したい。

(天 野 由 莉 Johns Hopkins University (院))